

上田ながの

表紙イラスト：目之下あかめ

淫辱の聖騎士

セリア



試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『淫辱の聖騎士セリア』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



淫辱の聖騎士

# セリア

上田ながの  
表紙 / 日之下あかめ

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

## Characters

---

### セリア

聖騎士団の団長である女騎士。非常に剣の腕はたつのだが、凹凸のない身体を持つのが密かにコンプレックス。ドジで怒りっぽい性格。

### ミシェル

セリアの副官である女騎士。幼い頃から彼女と共に育ってきた。女性らしいグラマーな身体つきをしている。セリアをよくからかうが、いざとなったら彼女の代わりに死ぬぐらいの覚悟は持っている。

### マルコー

魔術師。遺伝子に働きかける魔法や肉体改造を得意とする。

「参りましたね。数が多過ぎます……セリア様は大丈夫ですか？」

「……フンッ！ この程度ボクの相手じゃないね」

月明かりも届かぬ深い森の中。

其処彼処に黒い獣の死体が累々と連なる森の中。

二人の騎士が互いに背中を預けあい、剣を構えていた。

二人ともスタ・トアカ王国聖騎士団の証である白銀の鎧を身に着けている。ただ、身に着けた鎧は同じものでも、その体型には大きな差異があった。

一人は肩まで伸びる鎧と同じ白銀の髪を持った少女。小柄な身体にピッタリな少し丸みを帯びた顔は、どこか幼い。疲れているのか息は荒いが、強い意思を帯びた猫のような瞳は爛々と輝いていた。見るものを惹きつける強烈な輝きを内包した瞳。ただ、悲しいかな彼女の身体つきは鎧の上からでもはつきりと認識できるほど凹凸がない。歳は十代半ばくらい——見るものによつてはもつと下に見る事だろう。

名はセリア。ハーネンホーク。スタ・トアカ聖騎士団史上最年少にして、史上初の女性騎士団長である。

もう一人は腰まで届く緑がかつたロングヘアの二十代前半くらいの女性。色白の顔は人形のように整っており、切れ長の瞳は深い知性を感じさせる。因みに縁なしの眼鏡

をかけているのだが、鎧にはまったく合っていない。服装には気を使わない性質なのだろう。身体つきは非常に女性的である。セリアとは違い、乳房は胸板を持ち上げるほど膨らみ、腰はキュッと引き締まっている。太股は鎧下に身に着けているズボンの上からでも分かるほど肉づきがよい。並んで立っているセリアが何だか哀れだ。

名はミシエルⅡキングス。セリアの腹心である。幼い頃よりハーネンホーク家に仕え、セリアにとっては姉のような存在だ。

二人は剣を構えたまま、油断なく周囲に鋭い視線を走らせる。視線の先には全長二メートルほどある巨大な猿が数十、数百匹といた。

猿達は改造魔術師マルコーによって違法改造された魔獣である。最近近隣の町に出没しては女子供をかどわかし、畑を蹂躪するなど被害を出している存在だ。聖騎士団はこの魔獣を殲滅し、マルコーを逮捕する為に森に派遣されてきたのである。

(とはいえ——コレほどの数がいるなんてなあ)

敵の戦力を甘く見ていた情けなさに、セリアは思わず溜め息をつく。

確かにセリア率いる聖騎士団は圧倒的力を持っており、当初は魔獣を圧倒していた。が、魔獣は倒しても倒しても後から湧いて出てきた。まるで巣から湧き出る蟻のように。

騎士団の者はどんなに強力な力を持っていても所詮は人間、必ず疲労する。気づいてみ

7

れば聖騎士団は劣勢に立たされており、そこに至ってセリアは撤退を決断した。彼女にとって大事なのは誇りではない。第一に考える事は部下の命だった。

しかし、猿達も自分の領域を侵した者を簡単に逃がそうとはしない。全員が撤退するまでに、誰かが後方を支える必要があった。

そこで残ったのがセリアとミシエルである。団長自らが残る事に部下達は反対したが、セリアは譲らなかつた。

「ボクがこの騎士団で一番強いって知ってるだろ？ だから団長の命令は絶対なの！」  
完全に子供みたいな命令だったが、こうなつたセリアは止められない。結局団員達はミシエルを除いて命令に従つた。

「何でミシエルはボクの命令に逆らうんだよ！」

「あら、だつてセリア様……。私は貴女に勝つてますから」

そういつてミシエルは自分の胸元に手を当てて笑う。この態度にセリアは茹で蜻のよう  
に顔を真っ赤にしてキーキー怒鳴つたが、その様はまるで小猿だった。

そんなわけで現在に至る――。

「ウキヤアアアッ！」

絶叫を上げて飛びかかってくる猿。

「ブンッ！」

セリアは一つ息を吐くと、自分の背丈の倍はありそうな大剣を軽々と振るう。  
ヒュバツ！

真正面から迫ってくる猿に振り下ろされた刃は、巨獣をあつさりと二枚に下ろした。鮮血が舞い、白銀の鎧が赤く染まる。

「あら、さすがセリア様」

などといいつつ、ミシエルも握ったレイピアを猿に突き刺す。セリアほどの派手さはないものの確実に急所を射抜いているらしく、魔獣はあつさりと地面に倒れ伏した。

殿としてこの場に残ってから既に半日以上が経っているというのに、二人の動きにはまるで疲れが見えない。魔獣達にも彼女らの実力は分かるらしく、悔しげに唸りながらもなかなか動き出せずにいるようだ。

「このままならボクらだけで勝てちゃいそうだな」

フフンツと鼻を鳴らして胸を張る。

「そんな事言ったらいけませんよセリア様。大き過ぎる自信は死を招きます。自信を持たせめてその胸の大きさをくらいにして下さい」

するとミシエルが茶化すような言葉を掛けてきた。視線は胸板下の草原へ……。

「こ、み、みみ、ミシエルツ！」

一瞬で少女の顔は真っ赤に染まる。当然視線は魔獣から外れ、自分の家臣へと向く。

「グギャアアアッ！」

その隙を見逃さずに猿が飛びかかってくるが、セリアは視線を家臣に向けたまま剣を振るい、その首を刎ね飛ばした。

「あらら、可哀想」

ミシエルは主人の怒りなどまるで気にしていない様子で肩を竦めた。その態度がまた自分を馬鹿にしているように見え、セリアはカッカしてしまふ。ミシエルがからかってくるのはいつもの事なのだが、そのたびに湧き出す怒りをどうしても止められない。それがからかいを助長している事にも気づいていなかった。

「まあまあ、そんなに怒らないで下さいな。それよりも考えなくちゃいけない事がありますでしょうに」

「……むー、確かにそうだけどさ」

唐突に真面目な顔になるミシエルに促され、セリアは周囲を見回す。そこには数百匹の魔獣の姿。これまで何十匹も殺してきたが、まるで減っていない。

（そろそろ皆も森を抜けた頃だろうし……、そろそろボクらも脱出する頃合か）

さすがにこれだけの数を二人で殲滅する事はできないだろう。セリアは無言のままにミシエルへと視線を向ける。するとこの忠実なのか苛めっ子なのか分からない家臣は、分かっていますよといわんばかりに頷いた。言葉にしなくとも彼女には通じる。

セリアの立てた策は一点突破。敵魔獣群の中に突っ込み、ひたすら直進するだけ。逃げだけを考えるのならば、現状でこれほど成功率が高い策はないだろう。

「さて、それじゃあ行きますか」

ニコニコと笑いながらミシエルが告げる。セリアはその言葉にプクツと頬を膨らませた。「それは団長であるボクのセリ——ふ？」

そこで違和感に気がつく。

（なんだ？　なんだこの匂い？）

違和感は匂い。鼻をつくどこか酸っぱいような、それでいて懐かしい匂いだった。

「セリア様！」

ミシエルも気がついたらしく、きよろきよろと辺りを見回す。だが匂いの根源は分からない。それどころか、肉体にまで変化が起き始めていた。

（し、痺れる……）

匂いを嗅いでいる内に、全身から力が抜けていく。持っていた大剣が地面に落ちた。頭がくらくらし、足がふらついてしまう。ミシエルも同じ症状なのか、頭を押さえていた。それだけではなく、魔獣達まで倒れている。

「こ、これは……ま、まず……」

このままでは不味いと頭の中で警報が発せられたが、どうする事もできなかつた。視界

が黒く染まっっていく。ふらついていた足から力が抜け、立っている事もできずにその場に倒れてしまう。

「せ、り……」

やはり倒れてしまったらしいミシエルが、こちらに腕を伸ばす。セリアも彼女に向かって腕を伸ばそうとしたのだが、そこで意識は完全に途切れてしまった……。

\*

「で、ここはどこなんだ？」

目が覚めてみると、そこは見た事もない牢獄の中だった。牢とはいっても、広さはちよつとした広間くらいはある。石造りの牢である為か薄ら寒い。暗い牢内を照らすのは、か細い蠟燭の明かりだけだった。

「さあ、詳しい事は私にもちよつと……。ただ、多分ですが……マルコーの屋敷なのではないかと」

セリアの問いに答えるミシエルは、興味深そうに牢内を観察している。

「まあ、そうなんだろうな……」

魔獣では埒が明かないから魔法を使ったという事だろう。

と、そこまで考えて少女騎士は慌てて自分の格好を確認し——ホッと息を吐いた。さすがに武器は取られてしまっているが、鎧はそのままだ。脱がされて恥ずかしい格好にさせ

「ん……おふっ！ おっおおっ！ も、もう、あつきらめるんだ、ミシエッ——ほひいっ！」  
だからといってミシエルも止まらない。扱かれるセリアの肉棒は、刺激を受けるたびに何度も激しい痙攣を繰り返す。分泌される汁の中にはいつしか白濁したものが混ざり始めていた。

「だつめ！ んん、駄目だよおっ！」

じゅぐっじゅぐっ！

刺激を受けた下腹部が燃え上がりそうなほどの熱を持つ。ミシエルに喘ぎ声を上げさせ、感じさせているのは事実だったが、実際セリアも限界に近かった。いや、寧ろ状況的には少女騎士のほうが切羽詰っている。

男根を扱くなど初めての行為なのだ。どこか自分よりも手馴れている家臣の見様見真似でしかない。

「ち、力をぬ、抜いて下さい！ ふっふっ……て、抵抗しないっで！」

「んん、やつ、やだあっ！」

何度も首を横に振り、副官の言葉を拒絶する。とはいえ、そんな事で与えられる快楽を誤魔化せる筈もない。

粘液塗れになり、妖しげな輝きを放つセリアの肉棒は、始めに見た時の倍以上の大きさになっていった。不気味なほどに亀頭部は膨れ上がり、肉根に熱い熱気を含んだ何かが溜ま

る。それは噴火前のマグマのように、肉頭に向かって駆け上がろうとしていた。

（駄目！ オシッコ、オシッコ出ちゃう！）

尿意にも似た感覚に戦慄を覚えてしまう。意識するなど必死に自分に言い聞かせ、相手の肉棒を抜く事だけに無理矢理意識を集中させる。

ずちゅ、ずちゅつずちゅつずちゅつずちゅつ！

「おほっ！ お、おおっ！」

「くふうっ！ ふうふうふう……」

荒く甘い吐息と、淫靡な水音が石牢内に響く。

セリアの全身はいっしか汗塗れになっていた。肉棒の熱気上昇に合わせるかのように、全身の火照りも増していく。インナースーツは湧き出した汗によってベッタリと肌張りつき、少し気持ち悪い。剥き出しになった太股にも粒のように体液が光る。

「せ、セリア様……し、失礼します」

唐突にミシエルが顔を胸元へと寄せてきた。

「え？ ん——くひっ！」

部下の行動は一瞬。顔を寄せてきたかと思うと、疑問を覚える間すら与えてくれず、服の上から乳頭に舌を這わせてきたのである。

ちゅぐ、ちゅぷつ、んちゅう……。

ほとんど膨らみがない胸とはいえ、乳首は痛いほどに勃起していた。ミシエルの舌はそんな突起に蛇のように纏わりつく。服の上から舌尖で突いてきたかと思うと、歯で軽く甘噛みし、頬を窄めて吸ってくる。

「す、吸うな！ ほひっ！ ひぐっ、ひふうっ！」

途端に甦ってきたものは搾乳された時の記憶と感覚。脳髓が蕩けるような快楽だった。もちろんミシエルは舌を這わせながらも抜きを止めようとはしない。

「ほおっ、ほおおおっ！ おっおっおっ！ や、お、オシッコ、オシッコ出ちゃう！ やめ、やめって！ やめてよおっ！」

二つの刺激を同時に与えられ、亀頭に向かって膨れ上がるうとしていた尿意にも似た感覚が更に増大した。肉頭のワレメはパクパクと開閉を繰り返す。床に張りついた臀部の肉は波打つように痙攣し、蜜壺から分泌された愛液が床に水溜まりのように広がった。

（嫌だ！ このままじゃ、このままじゃ駄目だ！ ボクは、ボクはミシエルを護らなくちゃいけないのに！）

肉体を襲う愉悦は少女の全身から力を奪う。肉棒を握る腕からも力が抜けていく。優秀な部下はその隙を見逃す事なく、乳首とカリ首に更なる刺激を与えてきた。

燃えるように熱く、破裂してしまおうのではないかというほど、セリアの肉棒は不気味に膨れ上がる。痙攣が何度も繰り返され、肉体を襲う尿意に似た感覚が増大していく。唾液

でベトベトに汚れたインナーズーツから立ち昇るミシエルの発情臭が、鼻をつき、本能を刺激してきた。

「こ、怖い！ やつやあつ！ おつ、お……おひつ！ んんんん！」

無理矢理口を閉じようとする。歯を食い縛る事で、少しでも与えられる快樂から逃れようとしていた。だが、力が入らない。身体中が熱に浮かされているよう。

「んちゅ、はあ……。もう、もう我慢などする必要はありません。私に身を任せて下さい。大丈夫。貴女は私が護つてみせます」

ちゅくつと音を立て、乳首と口の間には唾液の糸を伸ばしながら、上気した顔でニッコリとミシエルが笑った。

彼女の笑顔はいつもと変わらない。見ているだけで心が休まる笑顔だった。

（でも、でも今はそれじゃ駄目なんだ！）

護らりたいのではない。護りたいのだ。

しかし、自然とセリアの身体からは力が抜けていく。

「だ、や、やだつ！ で、出る！ 出ちゃうよ！ 何かでつて……お、おとおおつ！ こ、こわつ、怖い、怖いよおつ！」

力が抜けた途端、不意を突くようにミシエルの指に力が入った。肉棒が握り潰されてしまうのではないかと思うほどの力が、踏み止まってきた最後の一线を越えさせる。

騎士の下腹部が僅かに膨らんだ。凄まじい圧迫感に一瞬呼吸さえもできなくなってしまう。小さな少女の蜜壺は、巨大な杭によって撃ち抜かれていた。分泌される愛液に、赤い破瓜の血が混ざる。膣口は無惨に押し開かれ、肉壁が内側に捲れていた。

「かつ！ あかつ！ か、かかか……」

瞳に浮かんだ涙がポロポロと零れ落ちる。

「セリアさ……ま……。セ、セリア……セリアーッ！」

家臣の悲鳴が遠くに聞こえた。

「ずじゅっ！ ずじゅるうっ！」

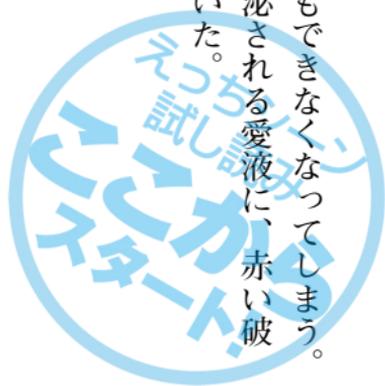
「うあっ！ うご、うっごくなあッ！ ほひっ！ ひっひっひっひいっ！」

悲鳴とほぼ同時に、魔獣が動き出す。

小さな少女と、それに覆い被さるように腰を振る巨大な猿。まさに獣の交尾の如き光景だった。

乱暴に振りたくられる魔獣の腰が尻に叩きつけられる。巨大な肉胴が膣壁を押し開き、子宮口に肉先を押しつけてきた。胎内を無理矢理拡張される苦しみが、小柄な身体を襲う。セリアは床に爪を突きたてながら、パクパクと魚のように口を開閉させた。

「とつまれっ！ 止まってえ！ おっおっおひっ！ くるっし、くるっしひいっ！」  
ぶじゅっぶじゅっ！



肉棒は突き入れられたかと思えば、今度は引き抜かれていく。膣口から巨棒が引き抜かれていくのに合わせるように、肉茎に絡みついた肉褌が外側に捲れ上がっていった。愛液に塗れた柔肉が外界に晒される。まるで内臓を引き抜かれていくかのような感覚だった。

「やひっ！ ひっ、ひいっ！」

苦しさと恐怖と屈辱がないまぜになる。ジタバタと手足を動かし、猿のもとから逃れようと無意識の内にもがく。

だが、魔獣は少女の足掻きなどまるで気にしていないようだった。それどころか、更に腰を振る速度を上げる。

パンッパンッパンッ！

「ひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっ！」

腰と尻がぶつかりあう乾いた音が響く。そのたびにセリアの口からは悲鳴が漏れた。

少女にとつて苦痛でしかない行為。騎士はただ耐え抜く事だけを考え、強く口を引き結ぶ。

「あっ！ ふひんっ！」

魔獣の巨大な掌が、少女の胸元に回されたのはその時だった。唾液で濡れたインナーズーツ下の平原を、ゴツゴツとした指が蹂躪する。巨大な指が勃起した乳頭を押し潰すかのような動きを取った途端、セリアの睨まなじりがトロンと下がった。

肉体を駆け巡ったのは散々覚え込まされた甘い痺れ。甘みを含んだ嬌声が口から漏れ出

てしまふ。

「安心して下さい。私の子供は女性を喜ばす手段も心得ております」

マルコーの愉悅を含んだ言葉が聞こえた。

その言葉通り、魔獣は胸を弄り回したかと思うと、結合部に手を伸ばし、グラインドを繰り返しながら膣口に激しい刺激を与えてくる。獣とは思えない繊細な動きは、少女に破瓜の痛みを忘れさせ、それ以上の快楽を与え始めた。

「くっひっ！ あっ！ あっあっあっ！ あーあー！」

小柄な身体は玩具のように揺れ動く。ペニスによる突き上げを受け、指で乳首を転がされるたび、プシュップシュッと愛液が失禁したかのように噴き出していた。

「やめろ！ お願いだ、やめてくれ！ 頼むからやめてくれ……」

目の前のミシェルが震えた声を漏らす。

「クク、団長想いの副官殿か。実に美しい忠誠心だ。では、私が貴女に一つだけチャンスを与えましょう」

すると魔術師がポンッと手を叩いた。何と素晴らしい事を思いついたのだろうか——といった表情を浮かべながら……。

「ほら、貴女の肉棒は未だ勃起したままだ。ですから……この場で自慰をして下さい。もし貴女が私の子供よりも早く射精に至る事ができれば、団長殿の膣中に射精する事だけは

勘弁してあげてもいいですよ。もちろん、代わりに貴女に子を産んでもらいますがね」

悪魔のような提案だった。信頼などできる筈がない。

それでもミシエルにとつては最後の希望だったのだろう。彼女は一瞬の間も置かずに、自分の勃起に手を伸ばすと、自らそれを扱き始めた。

「んふっ！ ふうふう……、わ、私が、私が絶対にセリア様を助けてみせます」

じゅぐっじゅぐっじゅぐっ！

セリア達の交わりを見て興奮していたのだろう。肉先から分泌される液体は既に白濁していた。

「あ、だ、だつめだ！ ぼ、ボクのこととはか、かまう——んあっ、んーんーんー」

セリアは部下の行動を止めさせようと声を張り上げるが、挿入される巨棒の一撃を子宮口に受け、言葉を中断せざるを得なくなってしまう。

（どうなってる？ 何で？ どうして？）

肉奥に突き入れられるたびに、少女の全身は蕩けるような官能の波に飲まれていた。ぐらぐらと視界が揺れる。太股は汗や体液に塗れていた。

パチンッ！

「んふひゅっ！」

バジュンッ！

「くほあっ！」

ブジュンツ！

「ひみゆうっ！」

腰と腰のぶつかりあう音も、段々と湿ったものに変わっていく。

「おっおっおっ！　せ、せりっ、せりっあさまあっ！　ほひっ、ほひっ！」

じつとこちらを見つめながら、ミシエルが肉棒を扱き続ける。ビクンビクンツと痙攣する彼女の肉棒は、始めに見た時よりも二回りほど大きくなっているように見えた。射精が近い事はセリアの目から見ても明らかである。

（だ、駄目！）

犯されるセリアの心を最後の一線で踏み止まらせていたものは、自分がミシエルを護っているという事だった。魔獣より先に彼女をイカせるわけにはいかない。

「ん、きゆうううっ！」

だから少女騎士は自ら動き出す。

魔獣の動きに合わせてるように腰を振り、膣に力を込めてより強く魔獣のペニスを締め上げた。

「ギャギャギャ！」

突然積極的になったセリアの様子に、魔獣は喜びの雄叫びを上げると、更に腰の動きを

激しいものとした。

パジュンツパジュンツパジュンツ!

「おあ、お、おっほ、か、らっだが、さけ、ぼつくが裂けるっ!」

限界以上に蜜壺が拡張されていく。挿入された肉棒と自分の身体が一体になっているかのような錯覚すら覚えた。小柄な身体全体がペニスによって貫かれているかのようなすらある。

蹂躪されていく肉体。子宮口を押し開かんばかりに叩きつけられる肉槍が、少女の理性を削り取っていく。

「魔獣に犯されながら勃起して……。最低な姿ですな。そんなに気持ちいいのですか?」  
マルコーの言葉通り、いつしか生やされたままだったセリアの肉棒が、再び猛々しく勃起していた。

「ちっが、感じてなんかいな——ひほおっ!」  
ずじゆるうっ!

自分を犯す魔獣の腕が肉棒に絡み、そのまま激しく扱きたててきた。一度射精をした事によって敏感になっていた肉棒は、一擦りされただけで射精に至りそうなほどの快楽を少女に与える。

ペニスに受ける刺激によってキュウツと蜜壺は窄まり、陵辱棒を激しく圧迫した。

「だつめ！ チンポ、チンポはだめえっ！」

悲鳴を上げてても魔獣は止まらない。それどころか動きはより激しくなる一方であり、いつしか膺中の肉棒は、ヒクつくように痙攣しながら、破裂するかのように膨れ上がっていた。

「おつき！ おつきくなっへる！ ほへあっ！ へあっへあっへあっ！」

セリアの表情がだらしなく崩れる。肉体には刻みつけられるような快樂が与えられ続けた。

それでも少女は、ペニスが膨張した意味を理解する。

「だひへ！ ぼつくの、ボクのなきやにだひてえ！」

膺出しされる事の意味など頭にはない。ただ、これでミシエルを護れるのだと本気で思っていた。

ずじゅぶつずじゅぶつずじゅぶうっ！

「お、おほおっ！ な、かが、ぼふのおにやかがばんぱんらあ……あ、あーあー」

少女騎士の言葉に従うかのように、魔獣が射精に向けての最後のストロークを開始する。小柄な身体はガクガクと揺らされ、銀色の髪が宙を舞う。いつしか身体を支えていた腕からも力が抜け、セリアは上半身を床に擦りつける破目になっていた。

「グギャギャギャッ！」

咆哮する猿。

「やつ！ まって、まっへ！ もうすぐ、もうすぐだからあつ！」

射精が近い事を悟ったのか、ミシエルが自慰を続けながら必死に懇願してくる。彼女の指は肉棒に絡むだけでなく、蜜壺にまで挿入されていた。二本三本と突っ込んだ指で、己の膣を掻き混ぜている。愛液が噴水のように飛び散っているのが、セリアの視界にも映った。（でも駄目だよミシエル。もう遅い。だって、だってさ……）

ずじゅぶつ！

「こ、ほ……んほあああああつ！」

止めといわんばかりに肉棒が膣奥へと突き込まれた。子宮口さえ押し開き、子宮壁にまで肉先が到達する。同時に亀頭部が不気味なほどに膨張し――。

どぶつ！ どぶつどぶつどぶつ……どつびゆるうううつ！

凄まじいまでの射精が開始された。

「で、でっへるうつ！ ほあつ！ あ、あちゅひ、あちゅひのがいっぱひでへるうつ！ お、おあ、おほあああつ！ おなつかが、ボクのおにやかがあつ！」

魔獣の射精量は凄まじく、一瞬でセリアの下腹部が膨れ上がる。まるで熱湯でも注ぎ込まれたのではないかというほどの熱気を感じた。

「きひつ！ くつる、にゃんか、にゃにかがくふうつ！」

意識や理性など容易に流しつくしてしまうような官能の波が身を襲う。視界は完全に白

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**